HACK

5

Last night

KAI SHIGIHARA

5.Last night

５．Last night

「はい」
「ドニ。俺だけど」
　電話の向こうで、苦笑する気配が感じられた。
「俺って誰だよ」
「この番号使ってるの俺だけだろ」
「その言い草はジュリだな。どうした。うまくいってるのか？」
「うまくいってる。今夜にでも潜入したいんだけど、ドニ、こっちに来てほしい」
　ドミニクがちょっと息をのむ。
「それは、お前が直接出向くってことか」
「そういうこと」
「レスリーとは、合わなかったのか」
「残念だけど、彼女はアンテナになれないよ」
　少しの沈黙の後、ため息が一つ、聞こえてきた。
「言葉は正確に使えよ。なれないんじゃなくて、したくないんじゃないのか？」
「俺にとっては同じ意味だ」
「そりゃ、お前にとってだけだ。また親父が突きあげ食らうだろ、軍を私有化するなとか」
「親父はわかってくれるよ」
「これだから三男坊は」
　あきれた口調を作っているが、この長男だって弟たちにはとびきり甘い。
「最初からそういう約束だったし」
「彼女を好きになったのか？」
　直球すぎる質問に、ジュリアスは咄嗟に答えられなかった。
　そして、可愛い弟たちのことをよく知っている長男には、そのちょっとの間で、十分だったらしい。
「意外。彼女はお前の好みじゃないだろ。もっとフワフワしたタイプが好きなくせに」
「うるさいな。好きとか、そういうことじゃない。まだ、一緒にいて三日なんだぞ」
「そういえば、四日前のお前は、レスリーの悪口ばかり言っていた気がするな」
「仕方がないだろ。お互い、第一印象は最悪だったんだから」
「本気なのか？」
「……わからないよ」

　好きか嫌いかと聞かれれば、間違いなく好きだ。だが、愛しているのかと聞かれれば、なんとも答えようがない。
　ドミニクに指摘されたように、ジュリアスが今までお付き合いしてきた女性は、どちらかというと可愛らしい年下タイプ。知的でクールで、お姉さんタイプのレスリーとは真逆かもしれない。
　だが、レスリーにはすごく魅かれるものがある。目が離せない。彼女の魅力に圧倒されているような気分になるときもある。
「ただ、ドニ、俺は彼女をアンテナには出来ない。きっと心配で集中出来ない」
「伯爵家の跡取り娘を、危険な任務にいかせるはずないだろ。それに、彼女は、レイのお墨付きだろ。初対面で、握手しただけでホットラインがつながるなんて、初めてじゃないか」
「……」
「親父も、俺もレイも、お前が軍の仕事に復帰することを望んでいるわけじゃない。以前のお前に戻ってほしいだけなんだ。わかるだろ」
　勿論、わかっているつもりだ。この二年、家族は誰もかれもジュリアスの心配をしてくれた。なんとか元気を取り戻させようと、色々なことをしてくれたり、提案してくれたり、時には強引に連れ出してくれたりもした。
　荒療治として、この任務が決まったこともわかっている。レイが、相性だけを考えて、レスリーを選んだことも。
　レスリーと出会い、自分でも驚くほど意識が変化し、それを家族が喜んでいることも知っている。そして、レスリーをアンテナにして任務を終わらせることで、ジュリアスの完全復活を確信したいのだということも。
確かに、レスリーとなら、うまくいくかもしれない。ここまで深く心を共有できる相手は始めてだった。だが、レスリーだからこそ、ジュリアスは怖くなる。もし、任務中にレスリーに何かあったら、自分はどうなってしまうか。きっともう、レスリーの恐怖を受け止めることなど出来ないだろう。レスリーを救えず、自分も駄目になる。それを考えると、どうしても前へは進めない。
「……とりあえず、今回は駄目。だから、ドニ」
「わかった。急ぎすぎてる自覚はあるよ。お前が髪を切って、まだ四日だもんな。今夜なら十時すぎになるが」
「それでいい。ありがとう」
　電話を切ると、携帯を閉ざし、枕の横に放り投げる。
　出先機関からホテルに帰り、少し眠ってすぐにドミニクに電話した。時計を見れば、すでに夕方五時だった。
（レスリーは何をしているんだろう）
　ベッドから起き上がりながら、彼女の気配を探す。
　一緒にいるこの三日で、彼女の気配はとても近くなった。彼女を思えば、すぐに気配を感じ取れる。

　どうやら、ビーチに出ているようだった。

　一時間ほどたっぷり泳ぎ、日も暮れてきたので帰ろうと支度をしていると、いつの間にか男が一人近づいてきていた。
　レスリーは水着の上に羽織ったパーカーの前を閉め、体の線を隠す。剥き出しの足はどうしようもなく、無防備だと感じてしまった自分に苛立つ。ビーチではこれぐらいの格好は当たり前で、目を引くほどじゃない。大丈夫だ。
「こんにちは」
「どうも」
　声をかけられたが、視線をむけることもせず、パラソルの下の荷物を黙々と片付ける。乱暴にバスタオルをバッグに押し込もうとして、余裕のない怯えたような態度だと思いなおし、綺麗にタオルを畳み直した。
「見てたけど、ずっと泳いでたね」
　背が高く、よく日焼けをした、多分、地元の男だろう。
　身なりはいいし、容姿も整っている。初対面の女性に声をかけるのは慣れた感じで、よく遊んでいるのだろうと思えた。レスリーの嫌いなタイプだ。
「もう帰るの？　疲れただろう、何か御馳走するから、休んでいかない？」
「……」
「無視ってひどくない？　ちょっとぐらいこっち見てもいいだろ」
　よくない態度だって、自分でもわかっている。だが、昔のようにうまくあしらうということが、どうしても出来ない。
「なあ。お茶でもどうかって聞いてるだけじゃん」
　冷静に見えるようにきちんと荷物をまとめ、ナンパ男に背を向けようとした。すると、後ろから手首をとられ、ぎくりと体がおののいてしまった。
「怯えてんの？」
　それに気がついた男が、余裕と自信を持つ。お高くとまった美人に無視されているわけではないと、気がついたのだ。
　毅然と払いのけなければと、レスリーは考えるのだが、どうしても体が動かない。
「一杯お茶飲むだけ。付き合ってくれよ」
　掴まれた腕が、男の方へと引っ張られる。力が強くて、抵抗しきれず、レスリーは男の方へと一歩踏み出してしまった。
　顔を上げると、思っていたより至近距離に男の顔がある。いわゆるイケメンだとは思うが、にやにやしてレスリーを獲物のように品定めする表情は、醜悪だった。吐き気がして、体が硬直する。このままゲロっとやってやれば、この男も逃げ出すだろうかと、どこか冷静な部分でそんな風に考えた。

「手を離せ」
　声と同時に、背後からレスリーは肩を抱き寄せられる。
「彼女の手を離せ」
　レスリーの手首を握っている男の手を、背後から伸びてきたジュリアスの手がひねり上げるように持ちあげた。
　男は短い悲鳴をあげて、すぐにレスリーの手を離す。同時に、レスリーはジュリアスの胸の中に抱き寄せられた。
　緊張と恐怖が、背後から抱きしめてくれるジュリアスに吸い取られていくような気さえした。
　そんなレスリーの表情と、にらんでくるジュリアスに、男は早々に退散することに決めたようだ。舌うちと、憎々しげな睨み一つで、レスリーに背を向ける。小走りに去っていく男の後ろ姿に、ため息が漏れた。
「大丈夫？　何された？」
　ぎゅっと抱き寄せられ、とても心配そうなジュリアスがレスリーを覗き込む。
「何もされてないわ」
「嘘言うな。君の恐怖が伝わってきた」
「ああいうナンパって苦手なの。それだけよ」
　これだけ側にいるのだから、レスリーが嘘を言っていないことは、ジュリアスにはわかるだろう。同時に、ただのナンパにどれほど動揺しているかも、知られている。それが普通ではないとわかってはいるが、レスリーには説明のしようがないし、したくもない。それもきっと、ジュリアスには感じ取れるはず。
「落ち着くまで、こうしていよう」
　レスリーの髪にキスしながら、ジュリアスがつぶやいた。
「君の恐怖が伝わってきて、俺まで恐怖体験だったんだ」
　筋骨隆々というわけではないが、ジュリアスは軍人だけあって、鍛えられた男らしい体つきをしている。そんな彼が、レスリーの感情につられてとはいえ、ナンパに恐怖を感じるなんて、なんだかちょっとおかしかった。
「その方が君らしい」
　微笑み交じりのジュリアスに、レスリーもようやくこわばった口元を微笑みの形に変えることが出来た。

　夕食は、ホテル内のレストランでとることになった。
　朝食、昼食は、備え付けのキッチンで簡単にすませているが、夕食はドレスアップして出かけることにしている。その方が、リゾート気分の恋人同士っぽいからだが、高級レストランはちょっと肩がこる。特に、ジュリアスのように、周囲の視線を集めるような美形が一緒だと。
　だが今夜は、ホテル内のビーチに面したレストランで、海に向かって硝子扉はすべて全開で、

とても解放的な雰囲気がリラックスできた。周囲も会話を楽しんでいる客がほとんどで、話声の大きさを気にする必要もない。
「少し、個人的なことを聞いてもいい？」
　メインのお皿が来てから、レスリーはちょっぴり勇気をだして聞いてみた。
「君も話してくれるなら」
　ちらりと視線を向けられ、レスリーは言葉に詰まる。
　きっと、ジュリアスが聞きたいのは、さっきのナンパ男に対する過剰な反応についてだろう。
「嘘だよ。いいよ。何を知りたい？」
「……休職中って、どれぐらい？」
「そろそろ二年」
（二年……）
「理由も聞いていい？」
「仕事がうまくいかなくなったから、かな」
「それって、パートナーとうまくいかなくなったから？」
　ぴくりと、ジュリアスの手が停まる。それで十分だ。
　一人では動けないジュリアス。仕事を休んでいたのは、パートナーを失ったからだろう。
　そのパートナーが、ジュリアスを易々と担いで運べるマッチョだったのか、レスリー同様に彼と波長が合ってアンテナになれた人か、どちらかはわからないけれど。多分、後者だ。
「……君はなんでもお見通しだ」
　三日一緒にいて、すぐそばで彼の能力を見て、色々とわかってきた。アンテナと呼ばれる存在が、どんな役割をもつのかも。
「私は、あなたの仕事上のパートナーにはなれないのかしら？」
「なれない。というか、なってほしくないんだ」
　一緒にいた間、レスリーがアンテナになれるのかどうか、ジュリアスが試そうとしたことは一度もない。本当は、それもこの仕事の目的の一つだというのにだ。
「もしなれたとしても、仕事をするかどうかの選択肢はあなたにあるんでしょ？」
　ジュリアスは軍の仕事をしたくないと言っていた。だから、あえてレスリーを試そうとしていないのだろう。
　だが、もしもの時、レスリーがアンテナになれるとわかっているのは、とても有用なことではないだろうか。軍の仕事をするしないの選択権がジュリアスにあるのなら、損なことではないはず。
「仕事には多分、復帰しない。レイの会社で働かないかと誘われているんだ。この二年も、ずっと彼のところにいたしね」
　レイというのは、始めてジュリアスと会った時に同席していた男性だろう。IT関係の会社社長。コンピューターの仕事なら、ジュリアスにぴったりだ。
「それでも君はかまわない？」
　と、ジュリアスは、レスリーの手をそっととり、自分の口元へと持っていく。手の甲に優しく

キスしながら、まっすぐに目を見つめられた。
（今夜、仕事を終わらせる）
　触れたところから流れてくるように、ジュリアスの思考が頭の中に入ってくる。
（終わらせるって、どうやるの？）
（データを見つけた。心配していたほど拡散もしていなかったし、在り処はすべてわかってる。セキュリティーシステムも全部掌握した）
（でも、一人で潜入なんてしたら）
（俺を易々と担いで運べるマッチョを手配したから、大丈夫だ）
　ふうと、レスリーはため息をついていた。
「かまわないけど、なんだか……残念、なのかな」
「……」
（……一緒に仕事してみたかったかも）
　レスリーはまっすぐジュリアスを見つめ返す。
　手の甲にぎゅっと押しつけられたジュリアスの唇の感触だけが、とても鮮明だった。

　深夜十一時。
　半時ほど前、ジュリアスは一人で出かけて行った。レスリーは当然のように、お留守番。一緒に行くという選択肢は、最初からなかった。一緒に行ったとしても、足手まといにしかなれないだろうから、当然なのだけれど。
　明日の朝、チェックアウトすると言われた。この仕事も、明日の朝で終了となる。
　レスリーがアンテナになれないのなら、また元の職場に戻ることになるだろう。明後日の朝には、何もなかったような顔をして出勤するのだ。
「……夢みたいだったな」
　仕事と言っても、高級リゾート地で楽しく過ごし、ジュリアスのお世話をすること。それこそ、本物の恋人のように。
　この先、一生、恋人なんて出来ないだろうと思っていた。その方がいいとも思っていた。
それなのに、仕事だから、お芝居だからと、ジュリアスと恋人のように過ごし、なんだかちょっとおかしくなってしまったのかもしれない。
　三日という短期間で、レスリーのとても深いところまで近づいてきたジュリアス。
　この自分が、男性の腕の中で安心を感じるようになるなんて、思ってもいなかった。ジュリアスのことなんて、ほとんど何も知らないに等しいのに、彼を心底信頼している。
あのキスは、とても不思議な体験だった。どうしてキスしたのか、キスしたかったのか、自分でもよくわからない。ただ、キスしたいと思った。もっと彼に触れたいと、そう思った。
「……潮時よね」
　これ以上一緒にいたら、仕事上だけの関係を超えてしまうかもしれない。そんなこと、望んで

いないのに。
　今ならまだジュリアスの及ぼした影響力は小さい。それが大きくなる予感はあるけれど、今ならまだ小さいまま消してしまえる。なかったことにしてしまえるだろう。
　夢は夢のまま、現実に戻れる。
「二年、か」
　あれからまだ二年。心の傷はまだ癒えていない。きっとこの三日で、ジュリアスに癒された部分もありそうだけど、でも、まだなのは自分でわかる。
　急ぐことはないし、ジュリアスが仕事以上の関係を求めているかどうかわからない。その気もないジュリアスを追いかけまわすなんて、ぞっとする。
　不意に、部屋の電話がなりだした。ホテルの内線電話だ。ジュリアスに何かあったのかと、レスリーは急いで受話器をとった。
「もしもし？」
　だが、何も聞こえてこない。電波状態が悪いのだろうか、レスリーは声を大きくした。
「もしもし！」
　だが、やはり何も聞こえてこない。おかしいと思い始めた時、部屋の玄関のロックを開ける、かすかな音が聞こえてきた。
　レスリーは受話器をもどし、慌てて玄関に駈け出した。
「ただいま」
　と、笑顔でレスリーに挨拶したのは、肩に大きな荷袋を抱えた、ドミニクだった。
「え？」
「重かったー！　ジュリの寝室、どこ？」
「え、あ、こっちです」
　頭の中には疑問符だらけだったが、レスリーはとりあえずドミニクをジュリアスの使っていた方の寝室に案内する。
　すると、ドミニクは、肩に担いでいた荷袋をベッドにどさりと下ろすと、袋の口を開けて中身をだした。入っていたのは、ジュリアスだった。勿論、意識はない。
「いつもどおりに意識はないが、問題ないよ。寝かせておけば、その内に起きるから」
　どうやら、ドミニクが、ジュリアスの手配した易々と抱えて運べるマッチョということらしい。兄とはいえ、中隊長を運び役に。ドミニクはジュリアスと同じように、軍人としてはスレンダーな方なのに、どこにこんな怪力が。などなど、レスリーの頭の中に疑問が次から次へと湧き出てくる。
「俺はこいつのことよく知っているからね。運び役に一からレクチャーするより、俺が来た方が早いって思っただけだよ」
「あの、無事に終わったんですか？」
「うん。無事に終了。お疲れ様、レスリー」
「いえ、私は特に何も」
　ドミニクが、よく眠っているジュリアスを視線で示し、話をするのなら場所をかえようという

ことだろう、寝室を出ていく。レスリーは、急いでジュリアスに毛布をかけると、後を追う。
「アイスコーヒーがあれば、一杯もらえる？」
「はい」
　二人でキッチンに入り、ドミニクはカウンターに寄りかかりながら、それはもうおいしそうにアイスコーヒーを一気に飲み干した。
「もう一杯いりますか？」
「よろしく」
　と、にっこり差し出されたグラスに、二杯目をそそいで渡す。
　アイスコーヒーを飲むドミニクの横顔は、ジュリアスによく似ている。特に今はしぼられた照明の下なので、髪や瞳の色の違いもよくわからない。彫が深く、貴族的に端正な顔立ち。中隊長という地位にありながら、弟のためにわざわざ出向いてくるなんて、この家族は強い絆と愛情で結ばれているのかもしれない。
「ドミニク、聞いてもいいですか」
「どうぞ」
「帰国したら、私はどうなるんでしょう？」
「元の部署に戻ることになる。君は今、休暇中になっているから。何の問題もないよ」
「私がアンテナだったら、ジュリアスは軍に戻り、私も彼と仕事をすることになったのでしょうか」
「それは、何とも返答しようがないな」
「どうしてですか？」
　こつんと、空になったグラスをカウンターに置き、ドミニクは腕をくんで、軽く首をかしげる。眉をひそめ、顔をしかめ、うーむと小さくうなった。
「ジュリアスが軍に戻るかどうかは、あいつの気持ち次第。勿論、軍はあいつの復帰を熱望している。でも、親父が、ああ司令官のね、あいつに無理矢理働かせるなんてことはさせないしね。なにしろ、あいつの能力は破格だろ？　だから、子供の頃から周囲が五月蠅くて。軍とか研究所とかさ。でも、父はずっとそういう連中から子供たちを守ってきたから。だから、君がアンテナだろうとなかろうと、軍に戻る戻らないは、ジュリの決めることだ」
　にこっと、ドミニクが微笑む。彼の笑顔は、ジュリアスのそれより数段明るい感じだ。ぱっと光がともるようで、心が温かくなる。
「もし、君がアンテナじゃなくて役にたたなかった、申し訳ないと思っているのなら、気にしないことだよ」
「でも、私はそのためにここに来たわけですし」
「それだけじゃないさ。ちゃんとこいつの生活管理してくれたでしょ。いつも一仕事すると体重落ちるくせに、今回は落ちてない。君のおかげだ」
　ドミニクはちらりと腕時計を見た。
「ごめん。朝までに戻らないと。君とジュリアスは、明日帰れるようにヘリを待機させているから」

「ありがとうございます」
　ドミニクは、来た時同様、風のように去っていった。
　多分、ヘリコプターで近隣の軍施設まで移動し、そこから小型ジェットかなにかで更に高速移動しているに違いない。
　行きは車でのんびりドライブしてきたジュリアスとレスリーも、帰りはヘリであっという間に帰れるようだ。となると、ジュリアスとゆっくり会話出来る時間も、もうないだろう。
　それが残念だと思う気持ちもあるが、多分、ほっとしている気持ちの方が強い。
　今ならまだ、彼の存在を自分の中から消去出来る。帰国して、以前と同じ自分で生きていけるから。
（あんなこと聞いて、ドミニクは、私がジュリアスと仕事をしたいんだと思ったかしら）
　アンテナになれなかった罪悪感だと解釈してくれたようだからよかったけれど、馬鹿なことを聞いてしまった。
（明日から、いつもの私に戻らなくちゃ）
　いつも沈着冷静な、クールビューティー。本音は心の奥底に隠し、一歩置いて人と接する。ジュリアスと二人きりでいた時のように、素直に心をさらけ出すことはもうしない。

　レスリーは、ジュリアスの寝室のドアをそっとあけて、彼の寝顔を確認する。
　この三日で、彼の寝顔は何度も見た。それを役得だと思えるぐらい、ジュリアスの寝顔は綺麗だった。
　お疲れ様、おやすみなさいとつぶやいて、レスリーはドアをゆっくり閉ざした。